



あおおに

さん しご シアター  
沈黙の映画館

ノプロプス  
noprops / 原作

くら だけんじ  
黒田研二 / 著

すずらき  
鈴羅木かりん / イラスト

## 卓郎

東部小学校の五年生。頭の回転が早く、決断力と行動力がある。頼れる存在。

## ひろし

北部小学校の五年生。小学生とは思えない、洞察力と知識がある。なぞ解きが得意。

## たけし

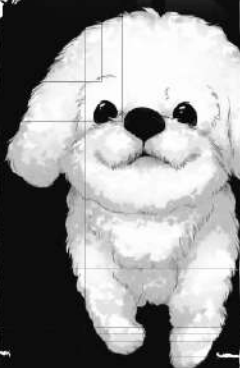
南部小学校の五年生。お調子者で臆病。でも、誰よりも友達思いのイヤツ。

## タケル

ビション・フリーゼという種類の犬。大切な人たちを助けるために、怪物と勇敢にたたかった。人間の言葉をすべて理解しているが、バレると面倒なので秘密にしている。近所のペットショップで出会ったシースーの女の子のことが気になっている。

## 美香

東部小学校の五年生。幼なじみの卓郎と、いつも一緒にいる。運動神経バツグン。



# 怪物

ブルーベリー色の巨人。人間を見るとおそいかかってくる。ひろしたちはこの夏、「ジェイルハウス」などあらゆる場所でこの怪物に遭遇したが、犬が苦手であることや、頭が重く泳ぐことができないなどの弱点を突くかたちで、なんとか魔の手を逃れてきた。宇宙から飛来した物質・ブルースターの中に入っていた虫「パラサイトバグ」が体内に入ることが原因で、人間が怪物に変異する可能性があることがわかってきた。

## ナオ

北部小学校の五年生。ひろしのクラスメイトで、クロさんとは叔父・嫁の関係。



## ナルナ先生

ひろしが通う北部小学校の教師。親友のユズキをはじめ、生徒たちが多数失踪し、閉鎖されたことになった碧奥小学校の元・生徒でもある。片想いをしてきたクロさんとデートに行くことを喜んでいたのもつかの間、ひどい裏切りを受けて傷つき、現在は学校を休んでいる。



## クロさん

怪物のことを「ブルーデーモン」と呼び、宇宙から飛来したブルースターを集め、この世界をブルーデーモンだらけにすることをもくろんでいる。自らもブルーデーモン化できる能力を得た。



# 目次

- 1 幸せの時間 006
- 2 ちょっとしたいいきこぎ 015
- 3 留守番はイヤだ 027
- 4 気まずいはち合わせ 038
- 5 天文台の怪事件 050
- 6 君の名は 059
- 7 逃げまどう人々 070
- 8 血染めの幕開け 078
- 9 はんぺんの襲撃 088
- 10 閉ざされた映画館 102
- 11 不思議な女の子 113

113 102 088 078 070 059 050 038 027 015 006

- 12 うばわれたブルースタール 123
- 13 ひろし君の思惑 135
- 14 床下の戦い 143
- 15 地獄耳のフワッティー 153
- 16 たけし君の行方 163
- 17 スクリーンごしのSOS 173
- 18 映写室の攻防 185
- 19 三体のフワッティー 194
- 20 沈黙ゲーム 203
- 21 映画館からの脱出 217
- ひろしによるなぞの解説 235

235 217 203 194 185 173 163 153 143 135 123

# あらすじ

この夏、化け物「ブルーデーモン」の攻撃や、クロさんのおそろしいたくらみに対し、知恵と勇気で何度もピンチを切り抜けてきた、ぼく——タケル。一緒に立ち向かったひろし君、たけし君、卓郎君、美香ちゃん、そしてナオちゃんとは、深い絆で結ばれているのを感じているんだけど……ぼくだけが「犬」であることが、もどかしいと感じるときもあるんだ。人間以外、立ち入り禁止の場所もあるしね。今日、これからみんなで行く「映画館」も、犬は入っちゃいけないらしい。でもぼくには、やらなきゃいけないことがあるから、こっそりついていくつもりだ。あれ？ 映画館からたくさんの人が逃げ出してくるけど、どうしたんだろう……？

# 1 幸せの時間

車のエンジン音で目が覚めた。

あわててソファから飛び降りる。

やつと帰ってきた！

ぼくはしつぽをふりながら、玄関へと急いだ。

駐車場の砂利をふみつけ、車がゆつくりと後退する。外へ出て確認しなくても、音だけ聞け

ば、それがお父さんの運転する車だということはすぐにわかった。お父さんの車のエンジン音は、お父さんが機嫌のよいときに歌う鼻歌みたいにいつもはずんだ音を立てる。

車のドアが開き、三秒ほどかけてゆつくりと閉じた。きつと人間にはわからないんだらうけれど、ドアを閉める音だつてその人によつて全然ちがう。耳に心地よいそのひびきは、まちがいなくお父さんの立てたものだった。

少しずつこちらに近づいてくるお父さんの足音。右足を地面につけたときの音が左足にくらべてかなり大きいのが特徴だ。お父さんは左の腰にヘルニアという持病を抱えている。そのせい

で、こんなふうに聞こえるのだろう。

足音を聞けば、その人の感情だつて敏感に伝わってくる。いつもとくらべて歩幅が格段に大きい。それに軽やかだ。今日のお父さんはかなりウキウキしていた。なにかいいことでもあったのだろうか？ お父さんの幸せそうな姿を見ると、ぼくも幸せな気持ちに包まれる。ぼくは玄関前に座り、お父さんが現れるのを今か今かと待った。

ロックがはずれ、ドアがゆつくりと外側に開く。いつもと変わらぬお父さんの笑顔に、自然としつぽのふり幅も大きくなった。

お帰りなさい！ お帰りなさい！ お帰りなさい！

お父さんの足もとをぐるぐるとかけ回りながら、ぼくは何度もあいさつをくり返した。お父さんのあまいにおいをかぐと、それだけで幸せな気持ちがあふくらんだ。

お父さんがそばにいてだけで、どうしてこんなにもワクワクするんだろう？

散歩で顔を合わせる犬たちも、ときどきぼくにお菓子をくれる近所のオバサンも、ひろし君やたけし君たちだつてもちろん大好きだけど、でもお父さんだけはやっぱり「好き」のレベルがちがう。お父さんのいない生活なんて、ぼくには絶対には考えられなかった。

「ずいふんとすずしくなつたなあ。よし。今から散歩に行こうか」

お父さんは仕事着のまま、くつすら脱ぎとせず、手にしていたかばんをぼく専用のお散歩バッグに持ちかえた。リードをぼくの首輪につなぎ、再びドアを開ける。

お父さんのことは大好きだ。いつもいいにおいがするし、ぼくを大切に思ってくれていることがひしひしと伝わってくる。散歩も大好きだ。毎日、いろんなにおいをかぐことができるし、たくさんの動物たちとふれ合える。

だからお父さんとの散歩は、大好きと大好きが重なって、しつぽがちぎれちゃうんじゃないかと心配になるくらいうれしい。

ぼくは待ちきれず、お父さんの足もとをすり抜けて家の外へ飛び出した。とたん、さわやかな風がぼくの全身の毛をやさしくなでていった。昨日までのしめつた風とはちよつとちがう。においも変わっていた。

どうして？

立ち止まり、お父さんを見上げる。

「ようやく秋がやってきたみたいだな」

空をあおいで、お父さんはいった。

そうか。秋って太陽の光をたくさん浴びたタタミみたいなおいがあるんだね。



ぼくは目を閉じ、秋のおいを胸いっぱい吸いこんだ。

あれ？ 秋のおいも悪くないけど、その中になんだかワクワクするにおいが混ざっている。これは……。

ぼくはまぶたを開くと、勢いよくかけ出した。もちろん、お父さんがおどろいて転んだりしないように、スピードを調整することは忘れない。

「おいおい、どうした？」

お父さんとはまどいながらも、ぼくのあとをついてきてくれた。仕事が終わったばかりでつかれているはずなのにごめんなさい。

十字路を左に曲がり、さらに歩調を速める。秋風にのつてただよってきたのはひろし君のおいだった。卓郎君や美香ちゃん、それにナオちゃんのおいも混ざっている。

ぼくの家から百メートルほどはなれたところには小さな公園がある。そこで水を飲み、砂場からだをこすりつけるのが、最近の日課だった。公園に近づくと、ひろし君たちのおいは強まっていく。どうやら、みんな公園にいるらしい。

いつもなら、これだけ走ればすぐからだが熱くなり、舌を出してハアハアとあらい呼吸をくり返すことになるのだけれど、今日は平気だった。ちっとも暑さを感じない。快適だ。秋です

ばらしい。これならいつもの三倍くらい歩いて、バテたりしないだろう。……いや、そんなに散歩したら、お父さんがバテちゃうかな？

公園にたどり着く。ぼくの子想したとおり、そこにはひろし君たちが集まっていた。ブランコの周りに身を寄せ、なにやらひそひそと相談しているように見える。

「あ、タケル」

一番最初に、ぼくの存在に気づいたのは、座っているブランコを小さくゆすつていたナオちゃんだった。トレードマークの大きな麦わらぼうしは今日も健在だ。

ナオちゃんは立ち上がると、ぼくに手をふった。続いて、卓郎君と美香ちゃんがこちらへ顔を向ける。

「オジさん、こんにちは」

ブランコの支柱にもたれかかっていた卓郎君が姿勢を正し、お父さんにあいさつした。卓郎君の横に立っていた美香ちゃんもぺこりと頭を下げる。

「どうしたんだい？　こんなところに集まって」

お父さんはたずねた。

「この公園、それぞれの家からちょうど同じくらいの距離にあるから、集合するのに便利なんで



す

卓郎君が答える。ひろし君とナオちゃん、美香ちゃんは北部小学校、卓郎君と美香ちゃんは東部小学校、たけし君は南部小学校に通っているので、みんなの自宅は気軽に行き来できるほど近くない。確か

に、このあたりに集まるのが一番手つ取り早いだろう。

……あれ？ そういえば、たけし君の姿だけ見当たらない。どこに行っちゃったんだろう？

「たけし君は？」

お父さんもぼくと同じ疑問をいだいたらしい。だれにともなくたずねた。

「あいつはちよつと……」

卓郎君が言葉をにごす。美香ちゃんは困ったような表情をうかべ、ナオちゃんは首をすくめてうつむいた。

あれ？ なんだか様子がおかしいぞ。

ひろし君にいたっては、さつきからひとこともしゃべらず、地面に座ったまま、ぼんやりと空をながめている。空には小さな白い雲がたくさんうかんでいた。まるで青い草原を羊が走り回っているみたいだ。

ねえ、なにかあつたの？

ひろし君のそばに近づき、前あしでふくらはぎのあたりをなでる。しかし、ひろし君はまったく反応しない。相変わらず、空を見上げたままだ。

「……ひろし君、どうしちゃったの？」

「朝からずっとこんな調子。かなり落ちこんでるみたいで……」

お父さんの問いに答えたのはナオちゃんだった。

「落ちこむ？ ひろし君が？」

信じられないといった顔つきでお父さんはいった。ひろし君はいつだって自信に満ちあふれている。落ちこんだ姿なんてこれまで一度も見ることがなかったから、それは当然の反応だった。

「なにかあつたのかい？」

「ひろし君……明日、碧奥山の天文台に招待されていたでしょ？ だから……」

ああ、なるほど、そういうことか。

ひろし君の落ちこむ理由を瞬時に理解する。ひろし君は明日のイベントをとて楽しんでにしていた。だから、こうなるのも仕方ない。

ひろし君が今年の夏休みに行った理科の自由研究は、なんと我が町のコンテストの最優秀賞を受賞した。ひろし君がどんな研究をしたのかはよく知らない。ぼくとひろし君が知り合ったのは八月の半ば。ひろし君はその前に自由研究を終わらせてしまっていたからだ。新聞の地方欄にのった記事によると、《アルピノダンゴムシの遺伝》について研究したそうんだけど、それだけではなんのことやらぼくにはさっぱりわからない。

コンテストの入賞者（にほうしょうしや）は碧奥山（へきおくさん）の八合目（はちごうめ）にある天文台（てんもんたい）へ招待（しょうたい）されることとなっていた。天文台は国の研究施設（けんきゅうしせつ）として使（つか）われていて、ふだんは所員（しよいん）以外の立ち入りはいつさい禁（きん）じられている。一般（いぱん）の人がほとんどだれも入（はい）ったことのない天文台（てんもんたい）を見学（けんがく）できるのだ。おおつびらに表情（ひょうたう）には出さなかつたものの、ひろし君（くん）が喜（よろこ）ばなかつたはずがない。

しかし、明日（あした）行（い）われるはずだったそのイベントは突如（とつじよ）、中止（ちゅうし）となつた。

昨夜（さくや）、天文台（てんもんたい）に強盗（きやうとう）がしのびこみ、居合（いあ）わせた研究員（けんきういん）が大（おほ）けがを負（お）うという事件（じけん）が起（おこ）つたからである。